

〔 研 究 主 題 〕
児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
－SNSの利用による友人関係への影響に着目して－

【 全体発表の概要 】

1 本研究のねらい

平成25・26年度の調査研究では、不登校の未然防止や初期対応、そして長期化している不登校児童生徒への対応に取り組むためには、「児童生徒理解」と「人間関係づくり」が重要なことを明らかにした。そこで、本研究ではこれまでの調査研究を基に、SNSを利用する児童生徒の実態を「学校楽しい一と」等から多面的に分析・考察し、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の組織的・計画的な指導・支援の実現をねらいとした。

2 実態調査のまとめ

(1) 教師の実態・考察

【実態】

- 教師対象の実態調査の結果からは、今の児童生徒を「感情のコントロールができない、自己表現力が乏しい。」「新しい関係づくりを苦手とする、良好な関係でも本音を隠す。」「SNSのやり取りで友達関係に悩む、精神的に不安定になる。」児童生徒が増えていると捉えている教師が多いことが明らかとなった。
- 児童生徒の友達関係づくりを促す取組状況については、「年間計画はない。」と回答する教師が約4割の状況であることが明らかとなった。

【考察】

- 多くの教師は児童生徒の人間関係づくりの指導・支援の重要性を理解しているものの、その取組については積極的な実践につながっていない実態があることから、「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの必要性が明確になった。

(2) 児童生徒の実態・考察

【実態】

- SNSを利用しない児童生徒は、SNSを利用する児童生徒が多くなると、友達との会話や活動に楽しさを感じなくなったり、クラスの所属感が低くなったりして、孤独感や疎外感を抱くようになりやすくなること明らかになった。
- SNSを利用する児童生徒は、SNSをする相手とは親しい関係を築き親和性を意識する傾向があるが、SNSの利用時間が増えると、相手とトラブルを起こさないように気遣ったやり取りをしなくなったり、メッセージの応答や関係性に悩んだり、負担感を感じやすくなったりすることが明らかになった。

【考察】

- SNSを利用しない児童生徒は、学級集団に対して疎外感をもち人間関係が希薄になりやすいことから、誰とでも分け隔てなく一緒に活動できる協調的行動力や、SNSを利用する友達とでも一緒に活動することができる適応的行動力を高めていけるよう、指導・支援をすることが特に必要であると考えられる。
- SNSを利用する児童生徒は、相手の立場を考えたSNSの利用や、対面で自分の気持ちや思いを伝える表現行動ができずに悩む傾向にある。そこで、自分の考えや気持ちを率直に表現できる行動や相手の伝えたいことを理解しようとするコミュニケーション行動を高める指導・支援が特に必要であると考えられる。

3 「豊かな人間関係づくり」の組織的・計画的な指導・支援の在り方

実態調査の結果から、「豊かな人間関係」を「児童生徒一人一人が存在感をもち、共感的な人間関係を育みながら、自己実現を図ることのできる人間関係」と捉え、SNSの利用実態から効果的な指導・支援の視点として次項のように設定した。

(1) 「豊かな人間関係」の育成を図る効果的な指導・支援を展開する3視点

- 人間関係がまだ十分に形成されていない新学期の始めに、他者との関わりの中で自己理解・他者理解を深めるとともに他者を思いやる「自他の理解」を育む視点
- SNSを利用しない児童生徒には、分け隔てなく互いの存在を理解して尊敬し合える「他者や集団への適応」を育む視点
- SNSを利用する児童生徒には、SNS上での不快な感情を抱え込まずに相手に伝えたり相談したりしてより良い関係を図れるようにし、また、SNSで交流するグループ以外の児童生徒とも関わりをもてるようにするなど「他者と交流する実践力」を育む視点

(2) SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の3視点による観点と具体的な態度

「豊かな人間関係」を育成するために、本研究では、それぞれの視点の観点と具体的な態度を以下のように整理した。

視点	観点	具体的な態度
自他の理解	自己理解	自分のよさに気付いている。
		自分の性格について分かっている。
	他者理解(共感性)	友達の考えや気持ちが分かっている。
		友達のよいところを知っている。
他者や集団への適応	協調的行動	みんなで決めたことを守って活動することができる。
		誰とでもわけへだてなく活動することができる。
	適応的行動	自分から友達をつくることができる。
		あまり話をしたことがない友達とでも一緒に活動することができる。
他者と交流する実践力	表現行動	友達の前で自分の考えや気持ちを伝えることができる。
		友達を区別することなく挨拶を交わすことができる。
	コミュニケーション行動	友達の意見と違っても自分の意見を伝えることができる。
		友達の立場を考えながら自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えることができる。
問題解決の場面	友達とうまくいけなくなったとき、自分から友達との関係をよくすることができる。	

4 検証改善サイクルで進める「豊かな人間関係づくり」

「豊かな人間関係づくり」の年間計画では、「Research（実態を把握する）→Plan（計画を立てる）→Do（実行する）→Check（点検する）→Act（改善する）」の図1に示す検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）に基づいて、改善を図りながら進めていくことが大切である。

① Research

「学校楽しいーと」、「SNSチェックシート」などの指標を用いて「調査」し、児童生徒の実態を客観的に把握して現状の課題を明確にする。

② Plan

明らかになった課題を基に、目標と取組内容を「設定」する。

③ Do

設定したPlanに基づいて、構成的グループエンカウンター、ソーシャルスキルトレーニング等を通した豊かな人間関係づくりを「実行」する。

④ Check

取組前にResearchした指標の結果と比較して、どのように変容したかを「点検」する。

⑤ Act

行動計画、目標や方向性を見直し、新たに「修正」した行動計画を立案する。

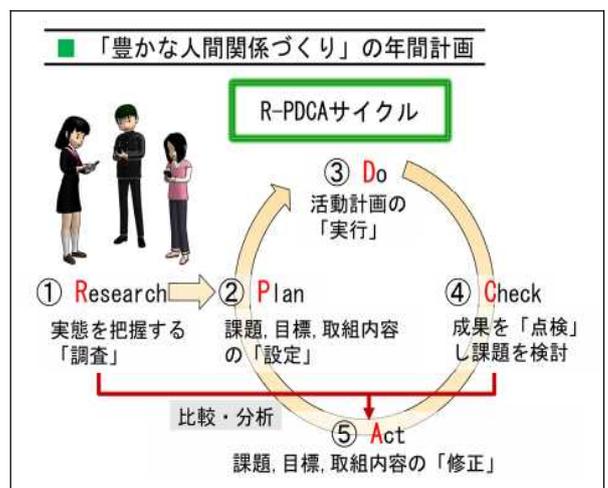


図1 検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）

【 分科会発表内容 】

1 学級活動と個別のR-PDCAサイクル

図2は、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の年間計画を検討する際に中核となる学級活動と個別対応のR-PDCAサイクルのモデル事例である。

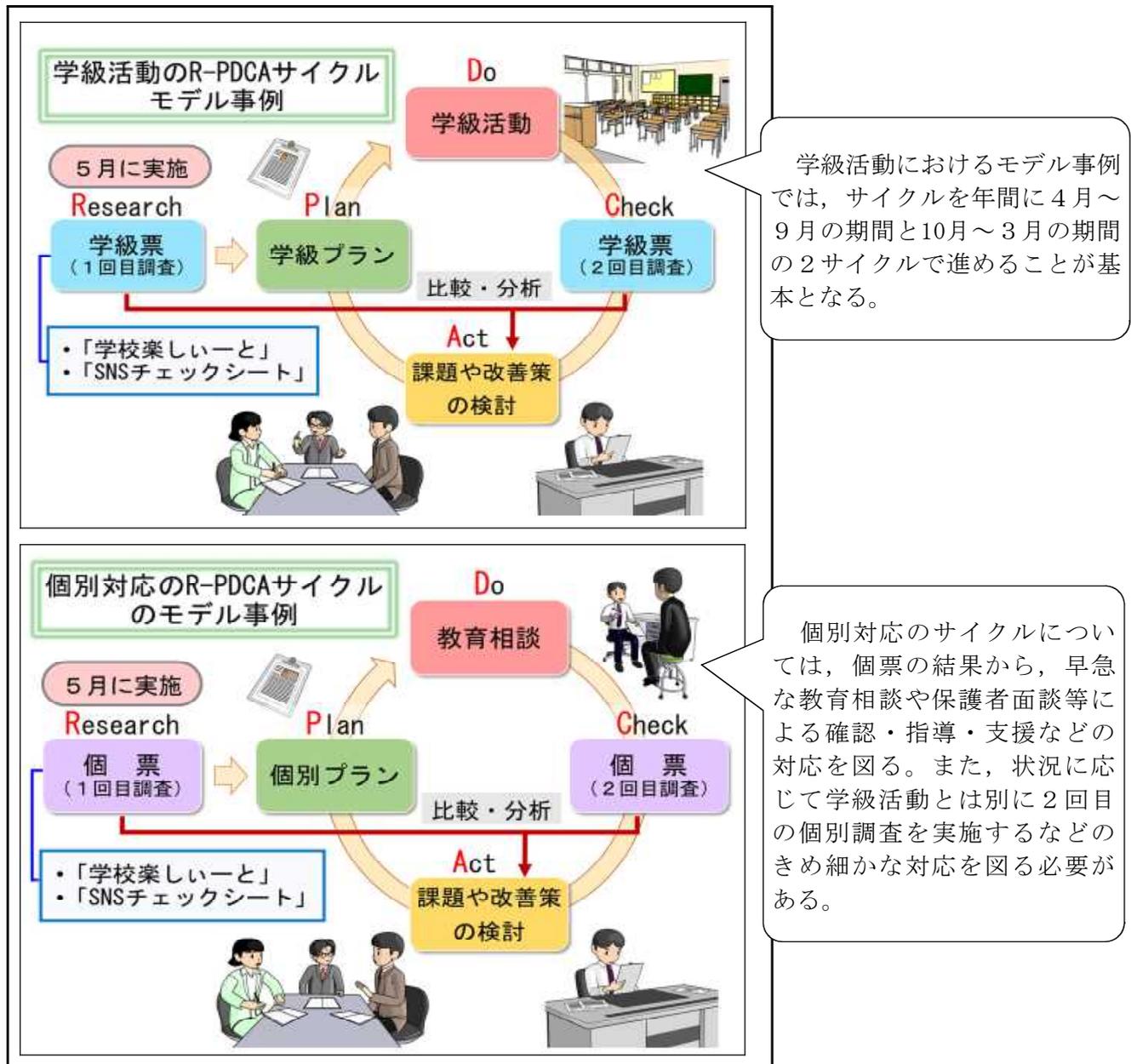


図2 学級活動と個人のR-PDCAサイクルのモデル事例

2 R-PDCAにおけるR（実態調査）についての実際

本研究では、R-PDCAのR（実態調査）について、二つの質問紙を提案したい。

(1) 「学校楽しいーと」について

「学校楽しいーと」*は、学校における適応感を把握するための質問紙であり、児童生徒理解を深める有効な手段となる。同じ質問項目、内容、質問数で、児童生徒の発達段階に応じて4種類ある。質問は6観点（友達との関係、教師との関係、学習意欲、自己肯定感、心身の状態、学級における適応感）の各4問に「いじめに関する項目」の2問を加えた合計26問で構成している。

※ 「学校楽しいーと」は平成24年度に当センター教育相談課が開発し、現在、多くの学校が活用している（詳細は、別紙及び県総合教育センターWebページ参照）。

(2) 「SNSチェックシート」について

SNS利用の実態を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の指導・支援を行う際は、「Research」の段階において、SNSを利用する児童生徒の実態を客観的に把握できる指標が必要である。そこで、児童生徒の実態を捉えるため、実態調査の結果に基づいて「SNSチェックシート」を開発した。「SNSチェックシート」の概要は次のとおりである。

ア 「SNSチェックシート」の内容構成

質問紙は、SNSの利用状況に関する5項目の質問とSNS観点から心理状態を客観的に把握する15項目の質問の計20項目で構成している。SNS観点に関する質問項目の回答は、「学校楽しいーと」と同様に最もふさわしいと思う数字の中から一つを選択する4件法とした（詳細は別紙のとおり）。

イ 「SNSチェックシート」の実施上の留意点

(ア) 対象学年

「SNSチェックシート」は小学校高学年以上の学年を対象に想定して作成している。

(イ) 実施時期

質問紙の回答の信頼性を高めるために、児童生徒が比較的落ち着いている時期や時間帯（午前中）を選んで実施するなどの配慮が必要である。

(ウ) 実施上の注意

「SNSチェックシート」の取扱い、結果を生徒指導・教育相談の資料として活用する際の注意を以下に示す。

- 児童生徒を多面的・多角的に理解するために、「学校楽しいーと」と併せて実施することが望ましい。「SNSチェックシート」は「学校楽しいーと」と同時に配付し、回答順は、学級の全員が関わる「学校楽しいーと」から回答するよう指示する。なぜなら、「SNSチェックシート」の質問項目は、SNSを利用する児童生徒を対象に質問項目が構成されているからである。
- 回答結果については、個人情報の保護に努め、「学校楽しいーと」と同様、学級全員の前で結果を公表したり、特定の児童生徒と比較したりはしない。
- 回答結果は児童生徒の一面を捉えた資料であるため、絶対視することなく、観察法・面接法等で児童生徒の理解を多面的に図ったり、他の教師と情報交換をして共通理解を深めたりするなど継続的な指導・支援に役立てる。
- 児童生徒が2回目以降の調査においても安心して回答できるよう、調査結果を否定的な見方で評価したり、叱責するための資料としたりすることがないようにする。
- 質問紙の回答の信頼性を高めるために、児童生徒が比較的落ち着いて回答できるよう、学校行事のない時期や時間帯（午前中）を設定するなどの配慮が必要である。

(3) 「学校楽しいーと」と「SNSチェックシート」の相関性

SNSの各観点と「学校楽しいーと」の各観点の関連性を統計処理（相関分析）した結果、表1に示す相関関係が明らかとなった。

表の見方を小学6年生の例で示す（太枠の箇所）。

SNS観点の「『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」が強くなると「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」は正の相関関係にあることから、これらの観点は値が高くなる傾向にあると判断できる。つまり、「『SNSをめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」を高める指導を行うと、「教師との関係」、「学習意欲」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」の5観点が改善されると考えられる。

一方、「『SNS利用のやり取り』の親和性」の意識が強くなると、「教師との関係」、「学級集団における適応感」は負の相関関係にあることから、「教師との関係」、「学級集団における適応感」は、低下するので何らかの指導・支援が必要になってくる。

表1 「学校楽しいーと」の6観点とSNS5観点の関連

		「学校楽しいーと」6観点						
SNS5 観点	小学6年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感	
		「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	.135* 正の相関	.138* 正の相関	.188** 正の相関	.152** 正の相関	—	.165** 正の相関
		「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	—	.138* 正の相関	.268** 正の相関	.300** 正の相関	.138* 正の相関	.206** 正の相関
		「SNS利用のやり取り」の親和性	—	-.138* 負の相関	—	—	—	-.135* 負の相関
		「即レス」の悩み・負担感	—	—	—	—	—	—
		「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.125* 正の相関	—	.180** 正の相関	.198** 正の相関	.227** 正の相関	.171** 正の相関
		「学校楽しいーと」6観点						
SNS5 観点	中学2年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感	
		「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	—	.246** 正の相関	.290** 正の相関	.163** 正の相関	—	.122* 正の相関
		「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.123* 正の相関	.323** 正の相関	.249** 正の相関	.208** 正の相関	—	.198** 正の相関
		「SNS利用のやり取り」の親和性	-.236** 負の相関	—	—	-.107* 負の相関	—	-.144** 負の相関
		「即レス」の悩み・負担感	—	-.118* 負の相関	—	—	—	-.134** 負の相関
		「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.168** 正の相関	—	—	—	.209** 正の相関	—
		「学校楽しいーと」6観点						
SNS5 観点	高校1年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感	
		「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	—	.127** 正の相関	.318** 正の相関	.155** 正の相関	—	—
		「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.176** 正の相関	.204** 正の相関	.254** 正の相関	.225** 正の相関	—	.129** 正の相関
		「SNS利用のやり取り」の親和性	-.158** 負の相関	—	-.119* 負の相関	-.178** 負の相関	—	-.157** 負の相関
		「即レス」の悩み・負担感	—	—	—	—	—	—
		「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.173** 正の相関	—	.125** 正の相関	.098* 正の相関	.307** 正の相関	.108* 正の相関
		「学校楽しいーと」6観点						
SNS5 観点	高校2年生	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己肯定感	心身の状態	学級集団における 適応感	
		「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	—	—	.180** 正の相関	—	—	—
		「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	.184** 正の相関	.213** 正の相関	.135** 正の相関	.198** 正の相関	—	.157** 正の相関
		「SNS利用のやり取り」の親和性	-.171** 負の相関	.095* 正の相関	—	-.124** 負の相関	.198** 正の相関	-.107* 負の相関
		「即レス」の悩み・負担感	.111* 正の相関	—	—	—	—	.095* 正の相関
		「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	.212** 正の相関	.115* 正の相関	—	—	.269** 正の相関	.151** 正の相関

・ 数値はPearsonの相関係数を示し、相関の強さを意味する（正の値は大きいほど正の相関関係は強くなり、負の値は大きいほど負の相関関係は強くなる。）。

・ *は5%、**は1%の有意水準を示し、「—」の表記は有意水準がない相関関係にあることを意味する。

2 SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の指導・支援の実際

「豊かな人間関係づくり」を育む指導・支援する活動は、リレーション（触れ合い）づくりを目的とする構成的グループエンカウンターや社会的スキルの習得を目的とするソーシャルスキルトレーニングなど様々な活動内容が考えられる。そこで、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の具体的な年間計画について、当センターが校種別に作成した学級活動における年間計画例と個別の指導・支援例を示す（別紙資料参照）。年間計画例では、活動と三つの視点「自他の理解」、「他者や集団への適応」、「他者と交流する実践力」との関連を○印で示している。

(1) 年間計画を作成する上での重要なポイント

「豊かな人間関係づくり」を育む指導・支援に重要となるポイントを次のように示す。

- 活動の内容と「自他の理解」、「他者や集団への適応」、「他者と交流する実践力」の関連性を明確にする。
- 年間を見通した教育活動を通して、「豊かな人間関係づくり」が深まるように段階的なねらいをもって発展させていく。
- 児童生徒の実態に合った多様な教育活動を用意し、児童生徒一人一人が協働で話し合うなど主体的・意欲的な活動がより質の高いものになるようにする。
- 特別活動で行う教育活動が単なる話合いや体験活動に終始しないように留意し、日常生活に還元するためにも「導入過程」、「展開過程」、「シェアリング（振り返り）過程」といった展開を重視する。
- 「豊かな人間関係づくり」を育む教育活動と各教科等における指導を有機的に関連させながら実施していく。

(2) SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の校種別年間計画例

別添資料の校種別年間計画は、当センターが作成した年間計画例である。小学校・中学校・高等学校の校種別年間計画の概要を次の表2に示す。

表2 校種別年間計画の概要

	学級活動の年間計画（学級プラン）	個別の指導・支援計画（個別プラン）
小学校	SNSを利用する児童が学級の半数で、自己肯定感や心身の状態が不安定な児童が2～3人いる学級の指導例	スマートフォンを所持しており、特異な行動を取る6年男児への個別指導・支援例
中学校	SNS利用のグループが固定化し、トラブルも表面化し始める一方、不登校や自己肯定感の低い生徒もいる学級の指導例	LINEのグループトークで友人関係に悩む3年女子生徒への個別指導・支援例
高等学校	SNS利用のやり取りが多く、良好な友人関係ができているが、一方で不登校経験者や自己肯定感が低い生徒もいる学級への指導例	SNSを利用しているが、自己肯定感が低く、「即レスの悩みや負担感」のある1年女子生徒への個別指導・支援例

3 今後の研究について

これまでの研究では、SNSの利用状況は児童生徒の学校適応感や友人関係に及ぼす影響があり、それを踏まえた「豊かな人間関係づくり」のための指導・支援の必要性を明らかにすることができた。今後の研究においては、次のことを課題として捉え、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の指導・支援の在り方について更に研究を進めていきたい。

- 小・中・高等学校の各校種の「SNSチェックシート」のデータをより多く収集・蓄積し、本県の特徴や傾向について更に明らかにすることが必要である。
- 児童生徒の健全な成長と人格のよりよい発達を促す開発的・予防的な生徒指導の視点から学校適応とSNS利用の影響の関連性については、今後、更なる研究が必要である。

第8分科会 教育相談課 調査研究発表

児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
—SNSの利用による友人関係への影響に着目して—



研究の概要

全体会の概要

- 実態調査(児童生徒・教師)の結果・考察について
- 「豊かな人間関係」の育成を図る効果的な指導・支援を展開する3視点について
 - 「自他の理解」
 - 「他者や集団への適応」
 - 「他者と交流する実践力」
- R-PDCAサイクル(検証改善サイクル)に基づく「豊かな人間関係づくり」の年間計画について



分科会(教育相談課)

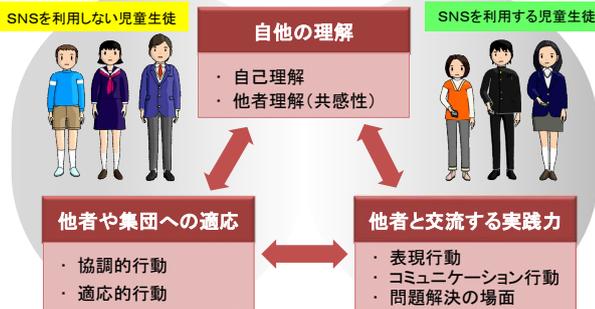
- R-PDCAサイクル(検証改善サイクル)における二つの質問紙の活用について
 - 「学校楽しいーと」
 - 「SNSチェックシート」
- 質問紙の指標に基づいた年間計画の策定と活用について



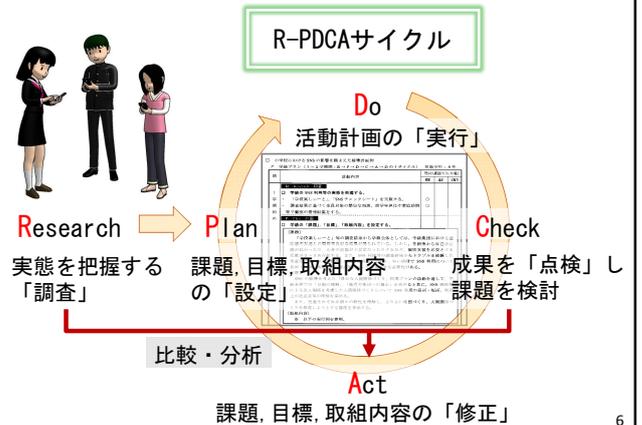
SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係」

児童生徒一人一人が存在感をもち、共感的な人間関係を育みながら、自己実現を図ることのできる人間関係

効果的な指導・支援を展開する3視点



「豊かな人間関係づくり」の年間計画



指標となる質問紙

Research & Check



7

■ 指標とする質問紙

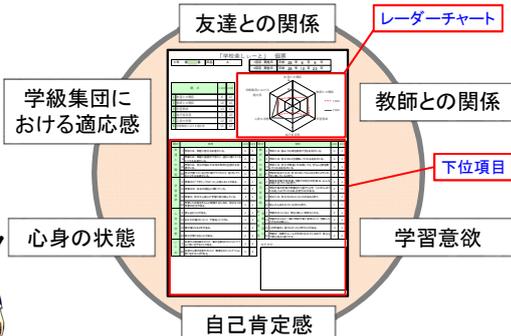
- 比較用「学校楽しいと」質問紙
 - 学校適応感を測る
 - SNSの利用状況と心理状態を測る
- 「SNSチェックシート」質問紙



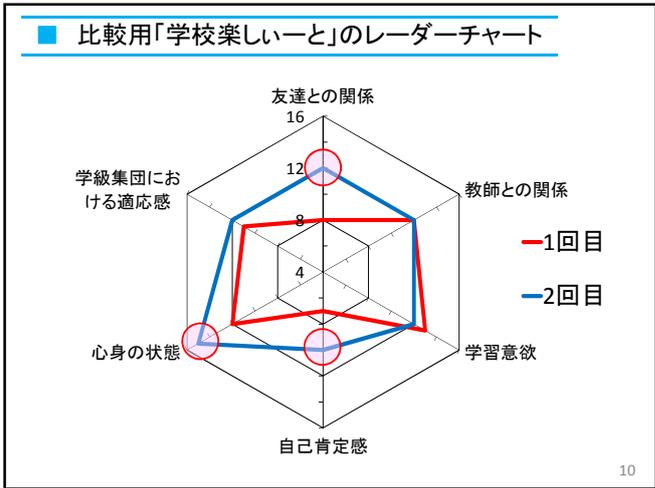
8

■ 比較用「学校楽しいと」質問紙

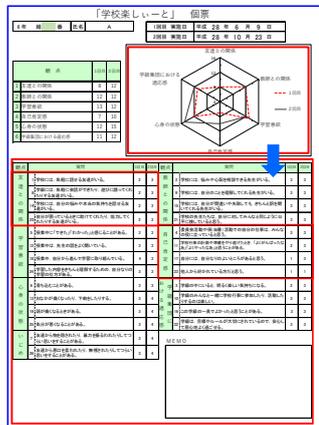
- 学校適応感を6観点と下位項目（26項目）から分析
- 調査結果の変容を時系列で比較



9



■ 比較用「学校楽しいと」の下位項目



11

■ 比較用「学校楽しいと」の下位項目

観点	質問	1回目	2回目
友達との関係	1 学校には、気軽に話せる友達がいる。	2	3
	8 学級には、気軽に会話ができたり、遊びに誘ってくれたりする友達がいる。	2	3
	14 学校には、自分の悩みや本当の気持ちを話せる友達がいる。	2	3
	20 自分が困っているときに助けくれたり、協力してくれたりする友達がいる。	2	3

12

■ 比較用「学校楽しいと」の下位項目

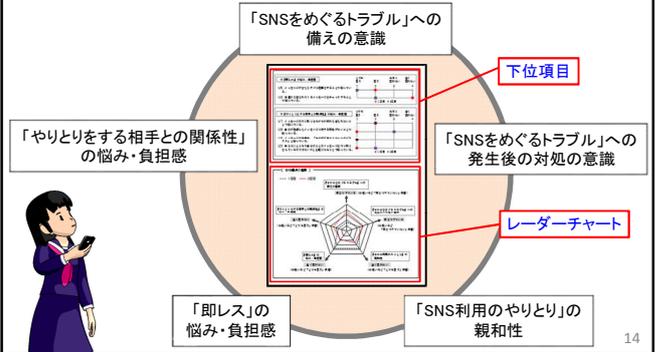
観点	質問	1回目	2回目
自己肯定感	4 委員会活動や係(当番)活動での自分の仕事は、みんなの役に立っていると思う。	3	3
	11 学校行事の計画や準備をやり遂げたと、「よくがんばったなあ」「よくやったなあ」と思うことがある。	2	3
	17 自分には、自分なりのよいところがあると思う。	1	3
	23 他人から好かれている方だと思う。	1	1



13

■ 「SNSチェックシート」

- SNSの利用状況と心理状態を分析
- 調査結果の変容を時系列で比較



14

■ 「SNSチェックシート」

SNSの利用実態

SNSの利用日数 SNSの利用時間 SNSの経験年数

グループチャット数 SNSのメンバー

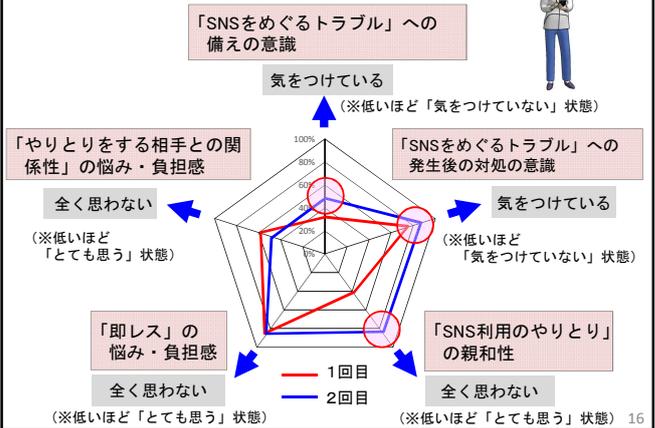
SNS観点

- 「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識
- 「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識
- 「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感
- 「即レス」の悩み・負担感
- 「SNS利用のやりとり」の親和性



15

■ SNSの各観点をレーダーチャートで表示

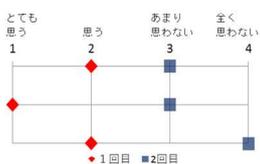


16

■ 「SNSチェックシート」の下位項目

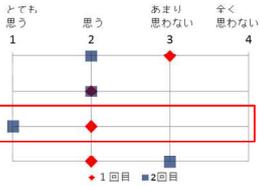
■ 「SNS利用のやりとりの親和性」

- (12) 友達とメールやチャットでのやり取りを通じて、友達の気持ちを確かめることができる。
- (13) 友達とメールやチャットでメッセージのやり取りをすることで、友達とのつながりをもてる。
- (14) 友達とメールやチャットでメッセージのやり取りをしてさびしさをすぐにまぎらわすことができる。



■ 「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感

- (17) メッセージのやり取りをなかなか終わらせられないことで悩んでいる。
- (18) 自分が送信したメッセージに対する反応がないことで悩んでいる。
- (19) メッセージの送信後、「あの伝え方でよかったのだろうか」と悩んでいる。
- (20) 知らないところで自分のこのメッセージをやり取りをしているのではないかと心配になることで悩んでいる。



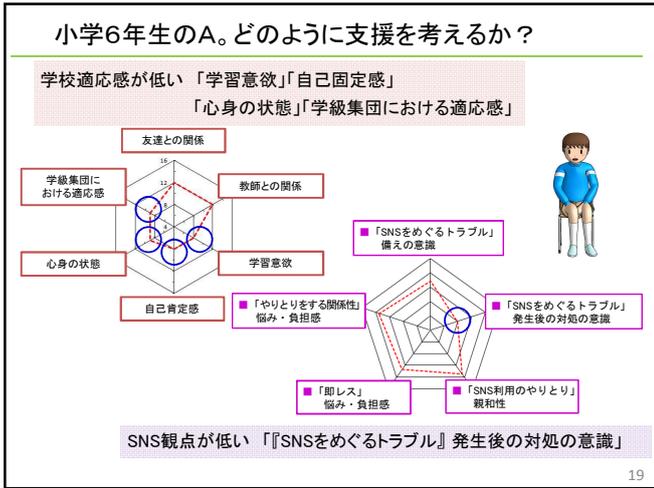
17

「学校楽しいと」と「SNSチェックシート」の相関関係

Research & Check



18



「学校楽しいと」の6観点と「SNSチェックシート」の5観点の関連 (表1)

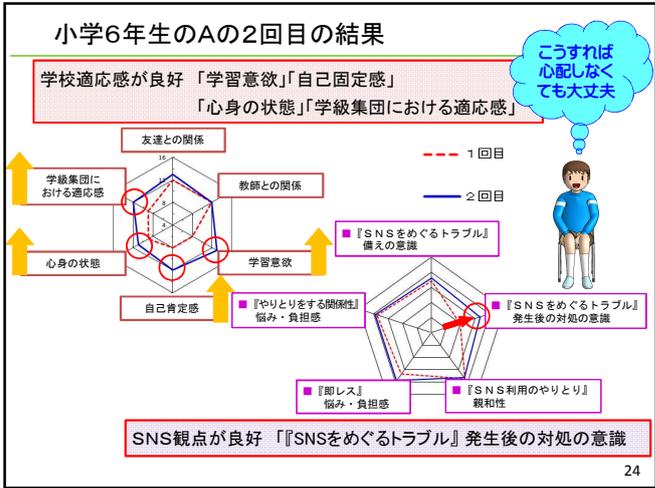
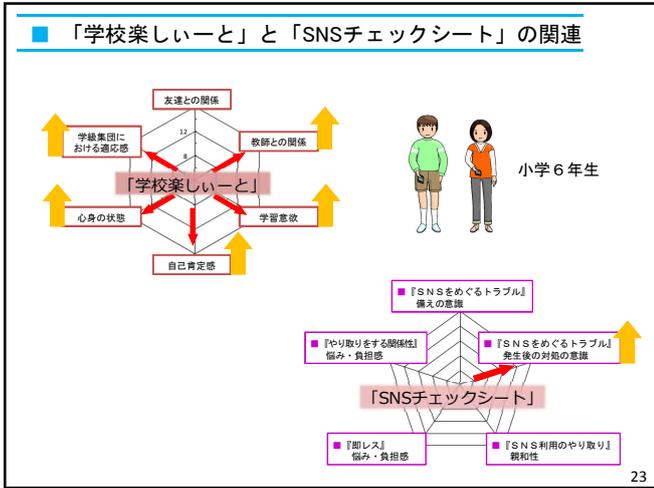
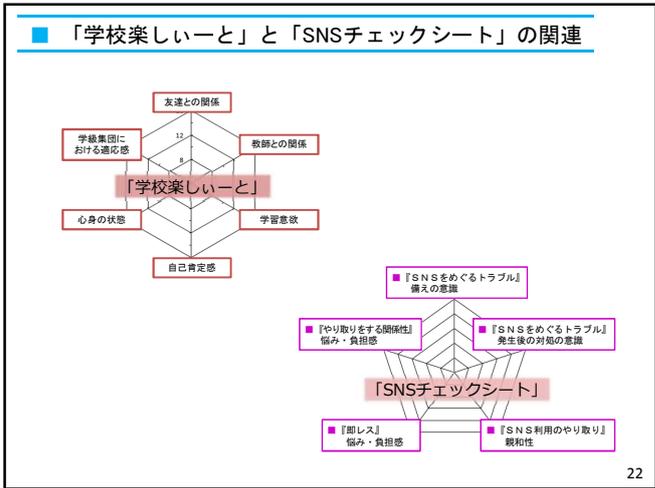
項目	「学校楽しいと」の観点					相関係数
	友達との関係	教師との関係	学習意欲	心身の状態	学級集団における適応感	
小学6年生	135**	138**	189***	152**	165***	0.32**
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「SNSをめぐるトラブル」発生後の対処の意識	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「SNS利用のやり取り」の親和性	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「即レス」の悩み・負担感	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「SNS利用のやり取り」の親和性	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「即レス」の悩み・負担感	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**

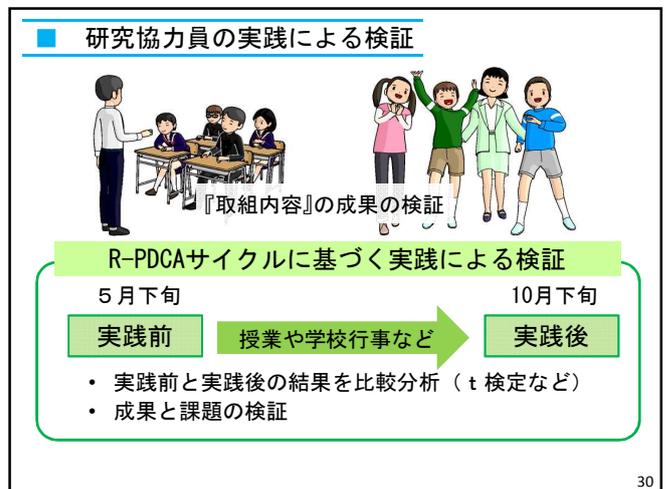
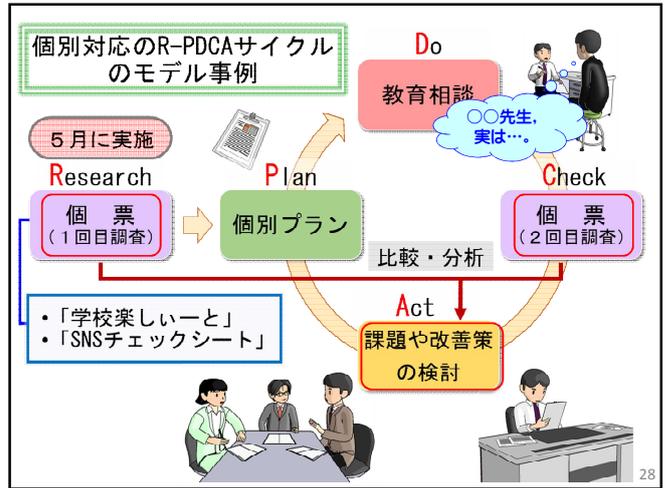
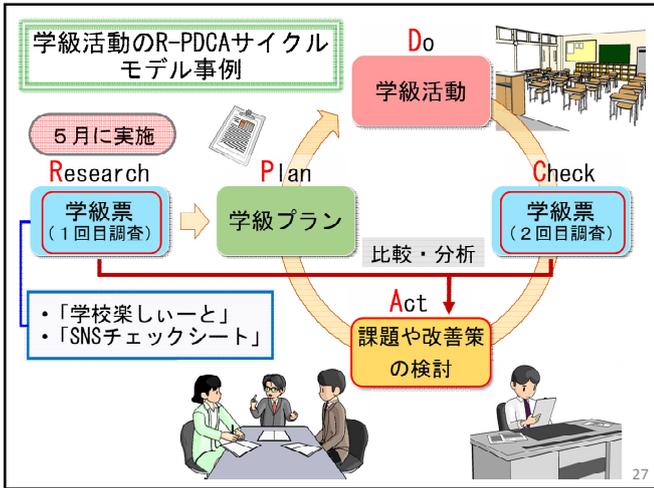
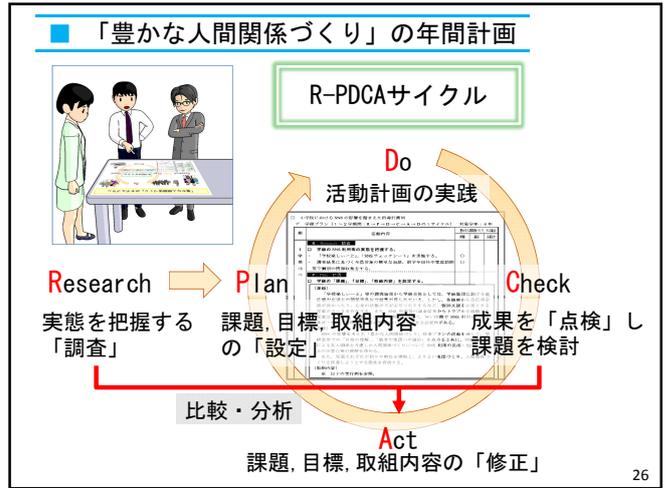
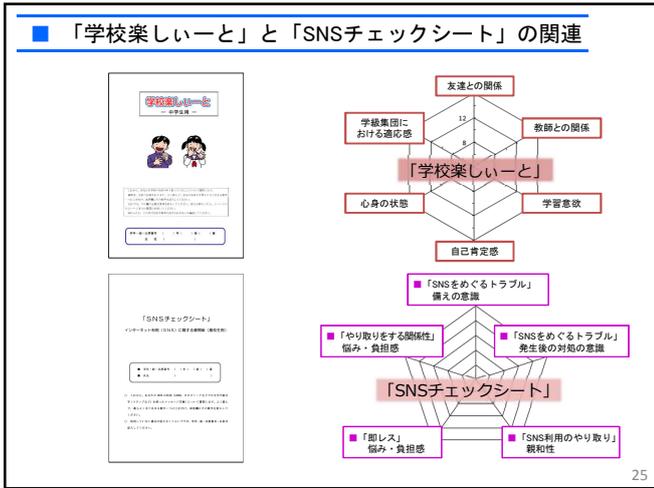
20

「学校楽しいと」の6観点と「SNSチェックシート」の5観点の関連 (表1)

項目	「学校楽しいと」の観点					相関係数
	友達との関係	教師との関係	学習意欲	自己固定感	心身の状態	
小学6年生	135**	138**	189***	152**	165***	0.32**
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「SNSをめぐるトラブル」発生後の対処の意識	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「SNS利用のやり取り」の親和性	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「即レス」の悩み・負担感	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	138**	138**	209***	200***	206***	0.32**

21





今後の研究



31

■ 今後の研究

- 小・中・高の各校種の「SNSチェックシート」のデータ収集・蓄積と本県の特徴や傾向の明確化
- 児童生徒の学校適応とSNS利用の影響の関連性についての研究



32

第8分科会 教育相談課 調査研究発表

児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究
—SNSの利用による友人関係への影響に着目して—



鹿児島県総合教育センター
教育相談課

33

小学校における豊かな人間関係づくりに関する生徒指導の実践

出水市立米ノ津小学校
教諭 横山 浩之

1 はじめに

本校は、鹿児島県北部、熊本県との県境にある出水市内にあり、創立142周年を迎える地域に根ざした学校である。また、出水平野には、冬になると大陸から鶴が飛来し、西には八代海が広がり、東には紫尾山がそびえ、自然豊かな環境に囲まれた学校である。全校児童数267人（13学級）の学校で、「自ら学び、基礎・基本を身に付け心豊かにたくましく生き抜く子どもを育成する」を目標に教育活動に取り組んでいる。

本校の学級数は、通常学級9学級、特別支援学級4学級があり、各通常学級内に学習に対する取組や周囲とのコミュニケーションにおいて個別の支援を要する児童が在籍しているため、生徒指導上の課題に対する指導・支援のみならず、特別支援教育においても全職員で個別の理解を深め、きめ細かな対応に努めている。

2 本学級における生徒指導上の課題

6年A組は男子11人、女子13人の計24人で、男女ともに落ち着きが見られ、活動に対して大変協力的に取り組むまとまりのある学級である。学習に対しても意欲的に取り組んでおり、全体的に、指示したことに熱心に取り組むなど素直な姿勢が見られる。しかし、家庭的な事情や個人の特性から、家庭学習の取組や集団活動において日常的に指導・支援を要する児童が数人在籍している。

3 調査対象学級の状況と1回目調査結果（6月実施）

(1) 学級におけるネット接続機器の所持とSNSの利用状況

	自分のもの	家族（親）のもの	ほとんど使用しない	
ネット接続機器の所持	14人	9人	1人	
	ほぼ毎日	週3～4	週1～2	ほとんど使用しない
メールやチャットの利用	1人	2人	4人	17人

表1 学級の「SNS観点」の割合

観点	1回目
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	91.9%
「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	83.0%
「SNS利用のやりとり」の親和性	69.9%
「即レス」の悩み・負担感	80.7%
「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感	84.1%

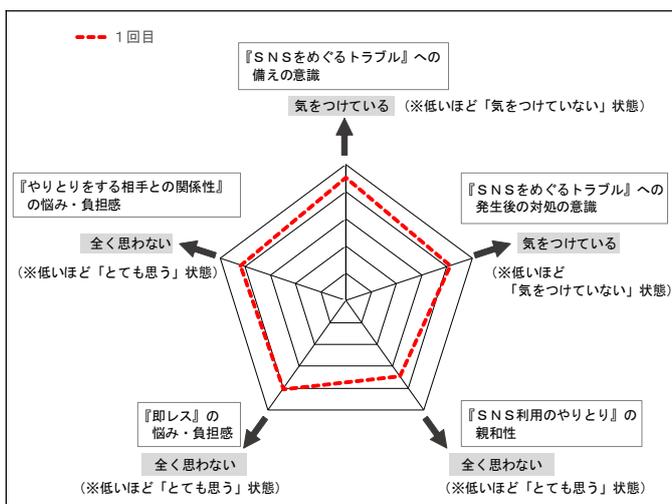


図1 学級の「SNS観点」レーダーチャート

本学級には、自分専用のネット接続機器を所有している児童が14人（約60%）、家族で所有する通信機器を含めると23人（約95%）が家庭においてネット接続環境が整っている。そのほとんどの通信機器は、パソコンとゲーム機器で、使用目的としては、ネット検索や音楽・動画の閲覧等が多かった。また、「SNSチェックシート」の観点別調査結果（表1、図1）から、一部を除いて、現時点でのメールやチャットの使用頻度は高くはなく、ほぼ毎日・週3～4回使用している児童においても使用目的は家族との連絡が主であった。そのため、SNS利用におけるトラブルの経験はほとんどの児童が無く、日頃からSNS利用等についての注意喚起はしているものの、SNSに対する児童の危機意識が高いとは言えない状況がある。

(2) 「学校楽しいーと」の学級・学年の結果

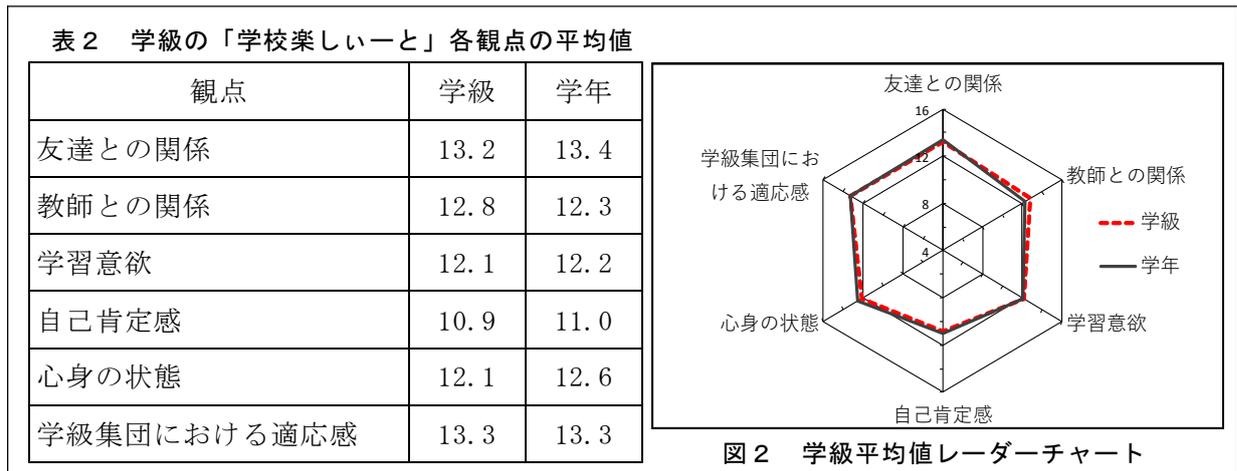
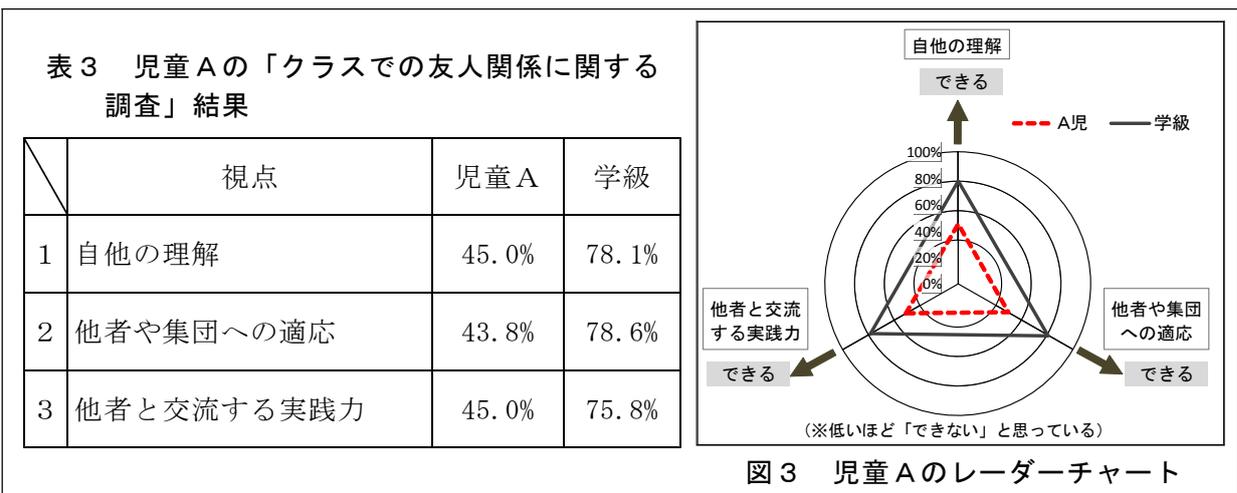


表2、図2より、学級・学年の平均値を比較すると、「心身の状態」と「自己肯定感」の平均値が他の観点に比較してやや低い状況が見られた。それ以外はさほど差はない結果であった。

個票において、「他人から好かれている方だとは全く思わない」など、「1」のポイントを付けている児童が数人確認できたので、個別の教育相談により、周囲との関わり方の改善が必要であることが理解できた。その他、特に深刻な悩みを抱えている児童は見受けられなかった。

(3) 「クラスでの友人関係に関する調査」の結果



第1回目の調査結果（表3、図3）から、学級の傾向としては、3視点ともに安定した結果になっているが、比較すると、「他者と交流する実践力」のポイントがやや低いことが分かった。次に否定的な回答の度数分布が多かった質問内容の4項目を表4に示す。この結果から、本学級の「豊かな人間関係づくり」における課題は、「自己理解」、「コミュニケーション行動」の観点を高める取組が必要であると捉えた。

本学級には、学級内で友人関係を作ることが上手にできない状況にある児童Aが在籍している。児童Aは、下級生と遊ぶことも少なくなかったが、そこでも、遊び方や物の貸し借りなどでのトラブルが見られた。児童Aは、なぜトラブルになるのかが理解できていない状況があり、原因が理解できないなど周囲との意識の差が大きく見られた。児童Aの「自他の理解」、「他者や集団への適応」、「他者と交流する実践力」の3視点の達成感を示すレーダーチャート(図3)が示すとおり、いずれの視点も学級平均を大きく下回っている。各質問項目を見ると、「友達のよさに気付いていない。」、「誰とでも分けへだて無く活動できない。」、「友達の前で自分の考えや気持ちを伝えることができない。」と回答している。このようなことから、日常の課題(コミュニケーション行動)に合わせ、児童Aには、周囲の友人と関心をもって人間関係を構築することや、自分の考えや気持ちを適切に伝えるための指導・支援が必要であると考えた。

表4 第1回目「クラスでの友人関係に関する調査」での質問項目(抜粋)

質問項目	度数分布(人)			
	4よくあてはまる	3あてはまる	2あてはまらない	1全くあてはまらない
・自分のよさに気付いている【自己理解】	0	18	6	0
・友達の立場に立って考えることができる【他者理解】	4	16	2	2
・友達の意見と違っても自分の意見を伝えることができる。【コミュニケーション行動】	2	16	5	1
・友達の立場を考えながら自分の考えや気持ちを伝えることができる。【コミュニケーション行動】	2	17	4	1

4 対象学級に対する「豊かな人間関係づくり」の指導・支援

(1) 自己肯定感を向上させるための「食育」に関する実践

児童の中には、自分自身に自信がもてず、自己有用感が低い児童もいる。今回、「食育」の観点から、自分のこれまでの成長を振り返り、多くの命に支えられた今の自分の価値(命の大切さ)を確認するとともに、周囲の人々や多くの命と関わっていることへの感謝と理解を深めることで、自己肯定感を向上できるように取り組んだ。

具体的には、生きている動物を、「肉」として考え、食べることができるかどうか児童に話し合わせ、個々の意見を学級全体で深めた後、絵本「いのちをいただく」を読み、畜産業に携わる人々の思いについても考えた。更に、被災地支援のための米作りや畜産工場見学等を通して、命を支える食への考えを深められるようにした。

自己肯定感を向上させるための「食育」に関する実践			
	学習活動内容	時	指導の留意点
つかむ	1 昨日、食べた夕飯について、思い出してお互いに話し合う。	8分	・一人一人、全員が、毎日、食事をしていることを認識させ、「食べること」が「生きること」を支えていることを確認させる。 ・食事の中に、食肉があることを確認し、生きた動物につなげられるようにする。
	2 今日の活動について考える。 [ブタの命について考えよう。]	2分	・めあてにつなげて考えられるように、生きているブタの写真を提示する。
見通す	3 映画「ブタがいた教室」を題材に自分たちならどうするかを考えさせる。	25分	・映画の冒頭から、実際に飼っているペットを食べることができるかどうか考える。
	4 ブタを「食べるか」、「食べないか」どちらかの意見を出し合ってディベートを行う。		・自分の考えをプリントに書かせるとともに、必ず理由を付け加えるよう指示する。
深める	5 絵本「いのちをいただく」の読み聞かせを聞いて、畜産農家の方々の気持ちについて考える。	5分	・育てた牛を出荷する畜産農家の方々の気持ちを知らせ、自分たちの食について振り返られるようにする。
まとめ	6 学習を振り返り、感想をまとめる。	5分	・日頃の自分の食事を振り返り、学習したことをまとめられるようにする。

(2) 自他のよさを認め合う「学級活動」の実践

自分のよさを感じてはいても、言葉で上手に表現することは難しい状況が見られたので、「自分の短所について見方を変えることで長所になる体験活動（リフレーミング）」を実施し、自己理解を深める実践をした。

一人では自分の長所をなかなか言い出せない児童もいるため、先にグループ内でお互いの長所を書き合う活動を行った。次に、グループごとに移動したり、個人で自由に移動したりして、より多くの友達の長所を書いて伝えるようにした。活動後、ほとんどの児童は、自分の長所についてたくさん書かれていることを喜んで受け止めていた。

しかし、長所に同じ言葉が並んでいる場合や、自分にとって意外な長所などが書かれていることもあるため、「長所をどのように考えていったらよいか」という長所の見方（例：一つの言葉の中には、いろんな意味の「よさ」や、自分では気付かない「よさ」がある）について共通理解を図った。

(3) 「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識を高める「道徳」の実践

児童が誰に対しても思いやりの心を持ち、相手の立場に立った適切な言動ができるようにするためには、適切なコミュニケーションの方法やルールについて学習する場が必要である。

授業では、「私たちのSNSのルール作り」をめあてとして、ネットを使う時のルールを自分たちで考え、検討することを通して、SNSを巡る利便性や危険性を理解し、適切に活用することの大切さについて理解させた。

さらに、同年代の児童がスマートフォンでSNSを利用して、様々なトラブルに巻き込まれるVTRを視聴させて、危機意識を高められるようにした。併せて、ネットトラブルに冷静に対応する方法やストレスをためない方法についても指導した。

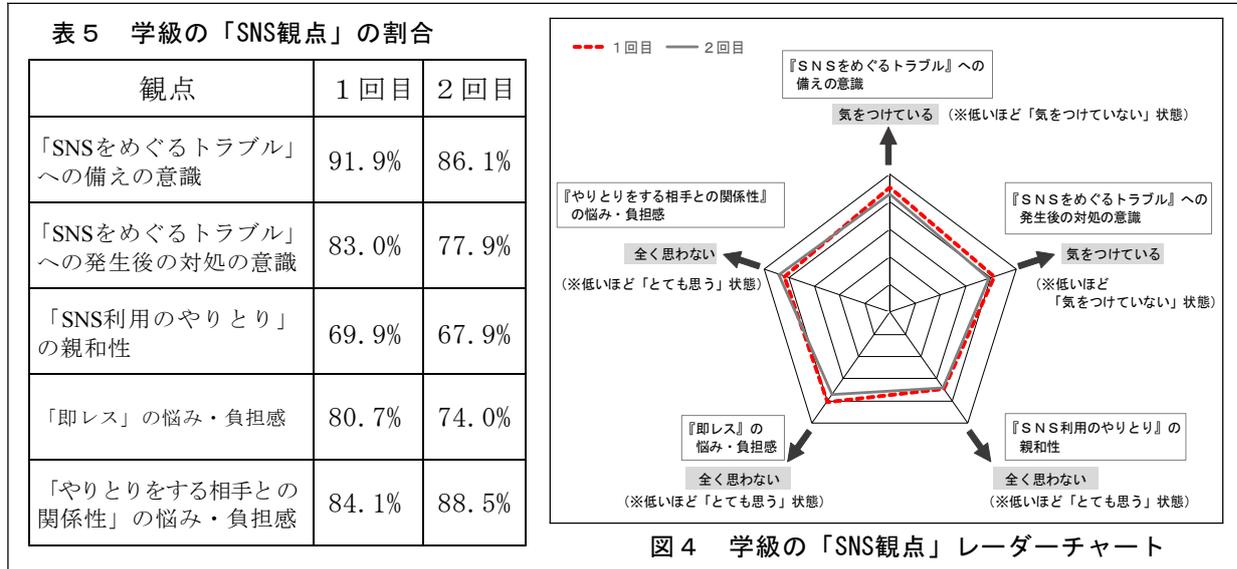
	学習活動内容	時	指導上の留意点
つかむ	1 「言葉あつめゲーム」に取り組む ○ 今回は「6年2組を表す言葉」を、1分間たくさん集めるようにする。	15分	・ グループで考えることで、協力して意見を言い合える雰囲気を作る。 ・ 学級を表す言葉を考えることで、自分たち自に対するイメージを具体的に考えられるようにする。
	2 今日の活動について考える。 自分の長所について考えよう。	5分	・ 自分のよいところを認められていないと感じている児童が多く見られるため、小さなことでも書けるようにしていく。
見通す	3 自分の短所について考える。 ○ 自分の短所を書き出して、その部分も、見方を変えれば長所になることに気付く。	20分	・ 書いた短所を長所に置き換えることで長所を出しやすくする。 ・ 短所を長所の言葉に置き換える際に、言葉が出てくるように、グループでお互いにアドバイスできるようにする。
	4 再度、じゃんけんゲームをして、それぞれのキャラクターになって、相手に気持ちを伝える。		・ どの友達のよいところでも書けるように、時間を十分に与える。席を移動して書けるようにする。
調べる	5 自分の長所が書かれたプリントを読み、感想を書く。 ○ 友達に書いてもらった自分の長所に関して、見方の注意をする。	5分	・ 自分が短所だと思っていたことも人から見れば長所になることを理解させる。
	6 これからの学級や、友達とのつき合い方に関する話をしてまとめ		・ 学習を通して、感じたこと思ったことをまとめる。

	学習活動内容	時	指導上の留意点
つかむ	1 SNSなどのネット利用で、便利（長所）になったこと、困ったことについて話し合う。 ○ 連絡が取りやすい。多くの友達を探せる。使うこと自体がおもしろい。 ○ 面倒くさい。誤解される。トラブルに巻き込まれる。	7分	・ プリントに書かせて、グループでまとめさせ、発表させる。 ・ 理解が深まるようイラスト等を提示する。
	2 今日の活動について考える。 SNSを使う時のルールを考えよう。	3分	・ SNSを適切に活用するために、どのような心がけが大切か意識させながらめあてを設定する。
見通す	3 ルールを考える際の視点を考える。 ○ 健康を守る。自分を守る。友達に迷惑をかける。等	20分	・ 導入で考えた長所、短所をもとに視点について考えさせる。
	4 グループでルールを作り発表する。		・ 視点に基づき、個人で考えさせ、次にグループでまとめる（広幅用紙にまとめさせる）。
調べる	5 出されたルールについて、意見交換をする。	5分	・ 多様な考え方があつて、気付かせ、守れるかどうか考えさせる。
	6 日常の自分について考える。		・ 日頃、SNSを活用する自分のことを振り返りながら、学習したことをこれからの生活に生かせるように意識付ける。
深める	7 VTRを視聴する。		・ 危機意識を高めるVTRを準備して視聴させる。 ・ 学習を振り返り、感想をまとめる。

5 「豊かな人間関係づくり」の指導・支援と成果の検証

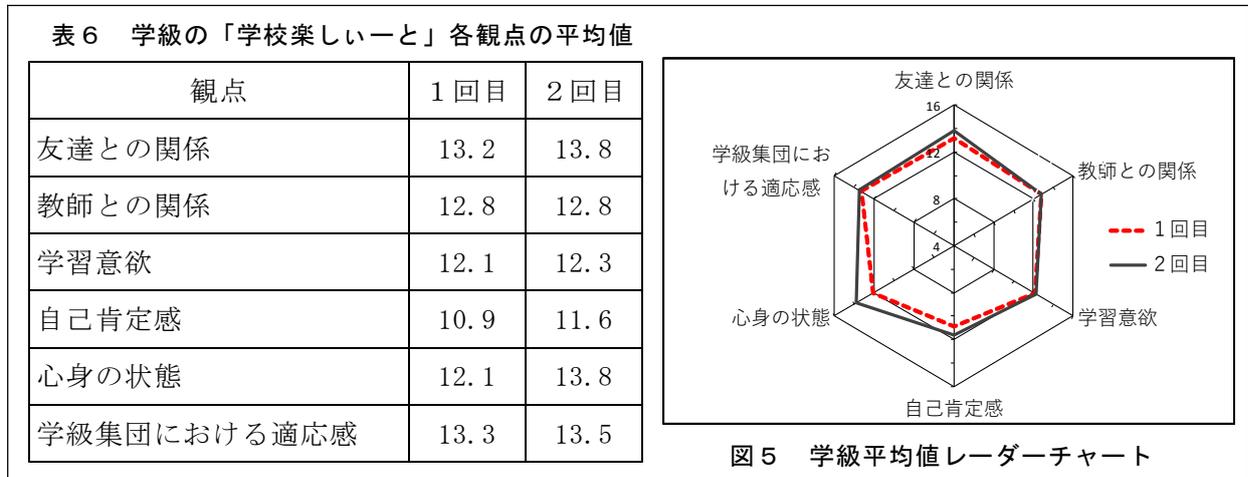
(1) SNSの利用状況調査から

表5、図4は、2回目の「SNSチェックシート」の観点別調査結果である。SNSを利用する児童が7人から9人に増えた。1回目と比較して、「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感が改善されている。



(2) 「学校楽しいと」の学級の結果から

表6、図5より、学級の平均値を1回目と比較すると、「友達との関係」、「学習意欲」、「心身の状態」、「自己肯定感」、「学級集団における適応感」が高くなっている。



(3) 「クラスでの友人関係に関する調査」の学級の結果

表7 第2回目「クラスでの友人関係に関する調査」での質問項目（抜粋） ※（ ）は1回目

質問項目	度数分布（人）			
	4 よくあてはまる	3 あてはまる	2 あてはまらない	1 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気付いている【自己理解】	1(0)	17(18)	5(6)	1(0)
・ 友達の立場に立って考えることができる【他者理解】	3(4)	18(16)	3(2)	0(2)
・ 友達の意見と違って自分の意見を伝えることができる。【コミュニケーション行動】	3(2)	16(16)	5(5)	0(1)
・ 友達の立場を考えながら自分の考えや気持ちを伝えることができる。【コミュニケーション行動】	2(2)	19(17)	4(3)	0(1)

第2回目の調査結果から、否定的な回答の度数分布が多かった質問内容の4項目は表7に示す結果となった。「他者理解」、「コミュニケーション行動」の項目については、3項目ともに向上しており、学級の課題である自己の表現力や周囲への理解が高まっていることが分かった。「自己理解」の項目については、全体としてほぼ変化がなかったことから、自己を振り返り、理解を深める指導・支援が今後も必要である。

また、児童Aの表8、図6の第2回目の結果を見ると、第1回目と比較して各観点において意識が向上していることが分かる。特に周囲の友達に対して、自分から関わりをもとうとする意欲も感じられた。さらに、このような意識の変化が、学習への取組にも影響していると思われる、成績の向上にも効果が見られた。今後も児童Aが他者への関わり方を大きく変えていくように継続的に支援をしていきたい。

表8 児童Aの「クラスでの友人関係に関する調査」結果

	視点	1回目	2回目
1	自他の理解	45.0%	70.0%
2	他者や集団への適応	43.8%	50.0%
3	他者と交流する実践力	45.0%	65.0%

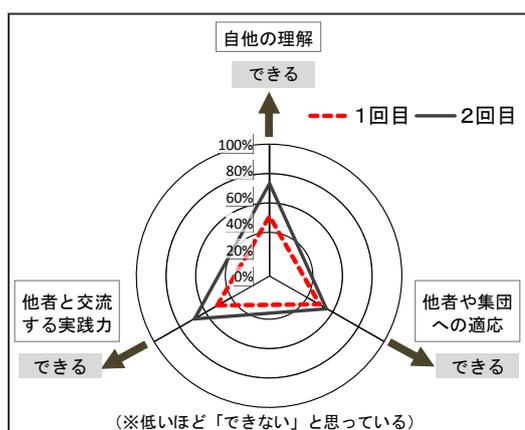


図6 児童Aのレーダーチャート

6 研究成果と今後の課題

(1) 研究成果

ア 「自他の理解」を深める取組を実践したことで、自己肯定感が低かった児童にとって、周りの友達が自分のよい点を認めていることを知るにより、周囲との良好な関わりや自己表現につなげることができた。また、「他者の理解」についても積極的に取り組むことができるようになった。

イ 「他者や集団への適応」を高める取組を実践したことで、自分の意見を伝えることに自信を持つことができ、コミュニケーション行動の向上につなげることができた。

ウ SNSの影響による友人関係を考慮した人間関係づくりに関する取組を実践したことで、SNSを使用することによる人間関係づくりの危険性について理解を深めることができ、友達と実際に会って話をしたり、活動したりすることの大切さやSNSを利用する際に個々が注意をすることで有効に活用できることを理解させることができた。

(2) 今後の課題

ア 自分に対する自信は、すぐに身に付くものではないので、継続して取り組んでいく必要がある。

イ 「問題解決の場面」については、実際のトラブルに直面することで、さらに問題解決の困難さを感じることになるので、他者に対しての自己表現力や表現技術の習得を今後も向上させていく必要がある。

中学校における豊かな人間関係づくりに関する生徒指導の実践

薩摩川内市立川内北中学校
教諭 埜中 勝実

1 はじめに

本校は薩摩川内市のほぼ中央部、九州三大河川の一つ川内川を境に北部中央市街地を校区とする。小高い常緑の森に囲まれた可愛山陵と新田神社の麓にあり、薩摩国府跡の貴重な遺産など古来の文化が息づく風情豊かな地域である。「学力向上への積極的な取組」、「生徒指導の充実」、「小中一貫教育の確立」に全校生徒 733 人、教職員 56 人が一丸となって取り組んでいる。

本校では、「原則として携帯電話（スマートフォン含む）は所持させないこと」を基本方針としているが、生徒の所持率は全国の統計結果に類似して年々増加傾向にあり、保護者にあらゆる場面で「携帯電話を使用させるなら約束事を守らせる」、「守れない時は使用を禁止」、「繰り返す時は解約する」という態度で向き合うように、使用における家庭での責任について訴えている。

また、携帯電話を所持することの危険性や功罪を主とした注意喚起の継続、居住区域内にある公衆無線LANスポットでの迷惑行為について指導を要する現状がある。

2 本校における生徒指導上の課題

大規模校としては全体的に落ち着いた学校生活を送っているものの、授業への取組という点で受動的な姿が多く見られる。話し合い活動や言語活動の場面を工夫した授業形態よりも、基本的事項を重視した授業や毎時の復習テストや出題範囲が限定されたテストなどには意欲的だが、自分の考えの発表や創作活動を盛り込んだ授業においては消極的な傾向がある。

数年ほど前に LINE 上での言葉を用いてのやり取りの延長から友人間のトラブルを引き起こしたり、ネット上に学校名付きで写真を投稿してしまいネットパトロールの指導を受けたりした事案があり、保護者に対して「持たせる上での家庭での責任」について話をしたこともあった。本年度は大きな問題は発生していない。

3 調査対象学年の概観と 1 回目調査結果（5 月実施）

(1) 概観

- ・ 3 年生は 6 クラス、男子 127 人、女子 116 人の計 243 人。
- ・ 部活動への加入率も高く、多くが活気ある学校生活を送っているように見受けられる。
- ・ 多くの生徒が LINE を利用しているものの、そのほとんどがやりとりするグループを限定しており、広範囲に渡って見ず知らずの人とつながる利用の仕方はしていないようである。
- ・ 夜通しネットゲーム等に没頭してしまい、朝が起きられず登校できないという生徒もいる。

(2) 1 回目の調査結果

ア 「学校楽しいーと」の調査結果（最大値を 16 としたときの学年の平均値）

表 1 学年の「学校楽しいーと」各観点の学年平均値

観点		1 回目
1	友達との関係	13.4
2	教師との関係	10.2
3	学習意欲	12.1
4	自己肯定感	11.4
5	心身の状態	9.3
6	学級集団における適応感	12.6

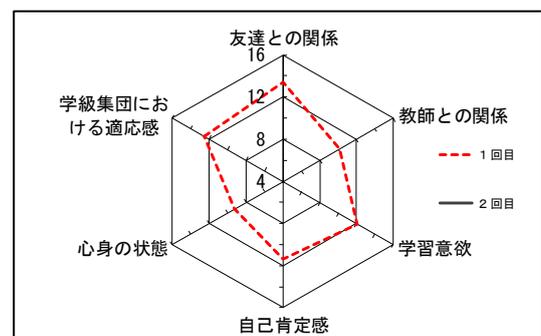


図 1 「学校楽しいーと」学年のレーダーチャート

レーダーチャートから6観点のバランスを見ると、「友達との関係」や「学級集団における適応感」については良好と判断できる。「学習意欲」についても概ね良好であるが、上述したように決して能動的とは言えない。「心身の状態」と「教師との関係」は、改善に向けて取り組む必要性を感じる。

イ 「SNS チェックシート」の調査結果（最大値を100としたときの学年の平均値）

表2 「SNS チェックシート」各観点の結果

観点	1回目
1 「SNS をめぐるトラブル」への備えの意識	76.2
2 「SNS をめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	46.5
3 「SNS 利用のやりとり」の親和性	36.8
4 「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感	63.1
5 「即レス」の悩み・負担感	66.2

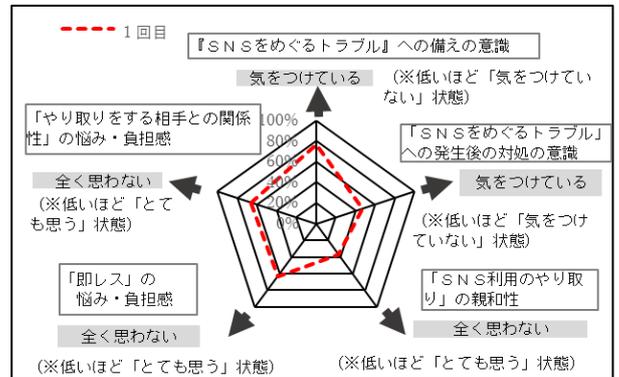


図2 「SNS チェックシート」学年レーダーチャート

「『SNS利用のやりとり』の親和性」との関係について、生徒自身が所持している携帯電話やスマートフォンだけではなく、保護者所有の携帯電話や学習用タブレット端末を利用してSNS上でのやり取りをしているケースもあり、留意する必要がある。また、「『SNS利用をめぐるトラブル』への対処の意識」が低いことから、情報モラル教育の必要性を感じる。

4 対象学年（学級）に対する「豊かな人間関係づくり」の指導・支援

- (1) 授業との関連に留意した導入時のアイスブレイキングの時間の設定

【例】「自分との共通点を三つ持っているクラスメイトを探そう」など

- (2) 自己開示の機会の設定（心身の状態を推察しながら）

SNS 関連問題の中核部分である「規範意識の高揚」と、それを構成する「思慮」、「節度」、「思いやり」、「礼儀」、「正義」について、個々の観念がどのレベルに達しているのか把握するために、自分の考えを表出する場面を意図的に設定する。

【例】IT企業が提供する資料をワークシートとして活用し、個人の情報についてオープンにする上でのルールや開示の限界、実際の社会問題から明らかにされた危険性と実生活での密接度等について、実態を把握し、自他の安全確保について考えさせる。

- (3) 学習活動の効果的な運営

教師主導型の一方通行の講義とならないための工夫（自己肯定感を育むことをねらって）

ア 導入部分の工夫、効果的な具体例、視覚的効果の活用など

イ マトリックス、ブレインストーミング、KJ法などを用いたSGEプログラム

ウ インシデントプロセス法やディベートによる言語活動



写真1 アイスブレイキングの様子



写真2 ワークシートを使った活動の様子

エ 「豊かな人間関係づくり」の授業の実際

現代社会と私たちの生活～情報化（情報を変える社会の仕組み）～

実施日：平成28年7月8日（金）5校時
対象学年：3年A組（男子21人，女子19人）

1 主題設定について

規範意識を構成する「思慮」、「節度」、「思いやり」、「礼儀」、「正義」等の中で、特に情報モラルに関して強く影響していると考えられている要素は「節度」や「正義」などの規範意識の高揚を主とするものが大半である。この要因を踏まえ、道徳的価値の内容項目の二つを3年社会公民的分野の単元「情報化社会」に関連させ、授業内容を構成した。

2 本時の内容

	主な学習活動	留意点や評価との関連など
導入	1 アイスブレイクを体験する。〔5分〕 「自分との共通点を三つみつ級友を探そう。」	○ 能動的に活動できる雰囲気づくり ・ 人間関係の構図にも配慮する。 ・ 展開へとつながるような支援を行う。
展開	2 個人情報を作成する。〔5分〕 氏名・電話番号・カミングアウト 3 ワークシートを使ってグループで交流する。 (1) カミングアウト〔5分〕 (2) Q&Aセッション〔10分〕 4 「ネット炎上」について事例を通して学ぶ。〔15分〕 (1) コミュニティサイトの入口 (2) 出口の見えないトラブル	○ オープンにする内容についてはあらかじめルールを説明しておく。 ・ 特に、「開示の限界」について考えさせる。 ○ 発表を聞いている生徒には聞きながら質問の準備をさせておく。 ○ IT企業が提供する資料を活用して「ネット炎上」の実態と自分たちの生活との密接度を感じさせる。 ○ ネット利用における「節度」と「正義」について考えさせる。
終末	5 本時のまとめをする。〔10分〕 (1) 「ネット炎上」の怖さ (2) 今後の生活で意識すべきこと	○ 感想文に偏らないように、自分の生活に今後どのように生かしていくかについて考えさせる。

3 評価

- 「玄関のドア＝スマホ上の画面」という考え方を通して個人情報の管理の大切さを捉えることができたか。
- 今後の実生活において、ネット利用時の「自他の安全」を確保していくための「節度」と「正義」の意識が備わったか。

5 2回目調査結果による実践の検証（10月実施）

(1) 「学校楽しいと」の調査結果（最大値を16としたときの学年の平均値）

表3 学年の「学校楽しいと」各観点の結果

観点	1回目	2回目
1 友達との関係	13.4	13.4
2 教師との関係	10.2	10.1
3 学習意欲	12.1	11.8
4 自己肯定感	11.4	11.6
5 心身の状態	9.3	9.7
6 学級集団における適応感	12.6	13.7

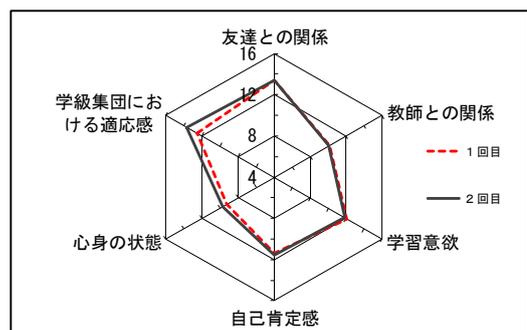


図3 「学校楽しいと」学年のレーダーチャート

「学級集団での適応感」は大きく改善され、「心身の状態」、「自己肯定感」もわずかに改善された。日々の学校生活において、生徒会活動を中心に活気ある雰囲気が保たれており、「学級集団における適応感」は、体育大会や文化祭の成功に向けて全力で取り組む姿がほとんどの生徒に見られた結果と捉えている。

他の観点は、前回とほぼ同様の結果と捉えている。若干の落ち込みがある「教師との関係」、「学習意欲」、また改善傾向にあるものの低い数値で推移している「心身の状態」については、学校の現状を振り返るに、全職員で「見逃すことなく漏らすことなく」という理念の下、学力向上対策の基盤である「学習の躰」の徹底や、より高いレベルで最後まで課題解決に取り組ませる学習指導に対して、生徒たちがある種の疲労感を感じているのではないかと推察している。

(2) 「SNS チェックシート」の調査結果（最大値を 100 としたときの学年の平均値）

表4 「SNS チェックシート」各観点の結果

観点		1 回目	2 回目
1	「SNS をめぐるトラブル」への備えの意識	76.2	76.9
2	「SNS をめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	46.5	53.7
3	「SNS 利用のやりとり」の親和性	36.8	43.9
4	「やりとりをする相手との関係性」の悩み・負担感	63.1	66.5
5	「即レス」の悩み・負担感	66.2	73.4

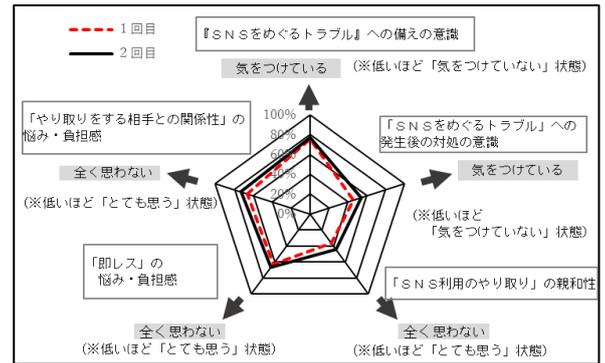


図4 「SNS チェックシート」学年レーダーチャート

1 回目の調査結果を数値で比較してみると、「『SNS をめぐるトラブル』への備えの意識」はわずかに改善された。「『SNS をめぐるトラブル』への発生後の対処の意識」は+7, 「『SNS 利用のやりとり』の親和性」は+7, 「『やりとりをする相手との関係性』の悩み・負担感」は+3, 「『即レス』の悩み・負担感」は+7となっており、大きく改善された。

1 回目の調査で課題となっていた「『SNS をめぐるトラブル』への発生後の対処」の SNS 観点は、トラブルにならないための予防に重点を置いた指導を道徳や学級活動等で行った結果、意識の向上につながったものと考えられる。また、「『SNS 利用のやりとり』の親和性」の SNS 観点が良好になったのは、SNS 利用で現実に発生している犯罪やトラブル、個人情報の流出等の課題を基にした授業を実施することで、「自分の SNS 利用の現状」を考えるきっかけとなり、注意喚起につながったものと考えられる。

(3) 「豊かな人間関係づくり」の調査結果

表5 「豊かな人間関係づくり」の3視点に関する結果

視 点		1 回目	2 回目
1	自他の理解	73.0%	75.6%
2	他者や集団への適応	75.6%	75.7%
3	他者と交流する実践力	64.1%	72.5%

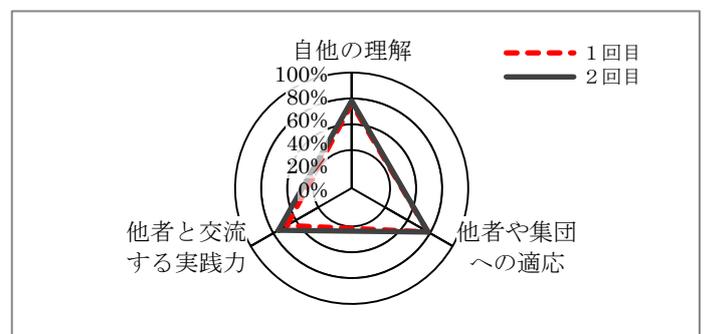


図5 学年の3観点レーダーチャート

「自他の理解」、「他者や集団への適応」については、友人関係を築いていけるような交流の場を集会活動や行事に向けた事前指導の中で意図的に企画したり、教師が円滑な人間関係づく

りを意識しながら日ごろの環境設定に配慮したりした活動の成果であると考えられる。「他者と交流する実践力」の視点は、最上級生として体育大会という大きな行事をやり切ったことが自信になり、相互の人間関係に大きく影響したものと捉えている。

6 研究成果と今後の課題

(1) 研究成果

SNSを巡る問題を扱った授業後、生徒たちは感想にもあるとおり、「コミュニケーション能力を高めていく必要性」を実感していた。また、メールやネット上のやり取りでは相手の反応が判断しにくいとため、表情または声のトーンなどに十分配慮して、自分の思いを正確に言葉で伝えることや、相手の気持ちを正しく読み取ることの大切さについて、考え直す機会となったと考えられる。

[授業後の生徒の感想]

- ふざけて投稿したものが即時に何万、何百万人もの人に広がり、5年後、10年後、又は一生つきまとって自分を苦しめることに恐怖を感じた。
- LINEなどをする時には言葉にも気を付けながらやるべきだということ、また、「スマホの画面上にある＝自分の家の玄関の外側にある」という言葉の意味に気付かされハッとした。
- 思った以上に世界中の人が投稿した写真を見ているんだということに驚いた。写真は自分の思い出として大事にとっておくものと改めて思った。
- 技術が進歩していくことは私たちの生活にとってとても便利なことだけど、それ以上に思いもよらない恐怖（場所を特定されるなど）と隣り合わせにいることを感じた。
- 世の中には暇な人がたくさんいるから簡単に情報を流すことは絶対しない。
- 文章力をしっかり身につけてから社会に出る準備をしないといけないと強く感じました。
- 私はまだケータイを持っていませんが、使用する前にこの学習をしていてよかった。

薩摩川内市における小中一貫教育の中でも、情報モラル教育については段階的指導計画の推進ならびに、機会あるごとに小中連携を図りながら情報交換を行っている。今年度は情報モラル・メディアリテラシーに関する3夜連続の地域PTA懇談会を実施した。携帯電話を持ち始める時期も低年齢化の傾向にあるので、小学校低学年層の保護者に向けた講話等も今後継続していく予定である。

(2) 今後の課題

保護者向けに、個人情報に関する現実的な犯罪・トラブルに巻き込まれる恐怖を扱った同様の講話を行った。その際、保護者から「情報モラル・メディアリテラシーに関する積極的な授業実施の要望」や、「小学校低学年の児童を対象とした情報教育の段階的な指導の必要性」、さらにケータイ・スマホに全く触れないというわけにはいかない現状を踏まえて、「学校・保護者・地域を主体とした情報交換会の実施」等の声が多くあがった。

「携帯電話は原則持たせないように」という学校としての指導の方向性は、既に指導の限界を感じている。デジタルネイティブ世代の現状を踏まえた小学校低学年からの段階的な情報教育指導、また学校・保護者・地域を主体とした情報交換に努め、所有及び使用に関する保護者の責任について、学校からの方針を明確に示しておく必要がある。

高等学校における豊かな人間関係づくりに関する生徒指導の実践

県立鹿屋工業高等学校
教諭 吉田 公一

1 はじめに

本校は、昭和19年（1944年）に鹿屋工業高校として創設され、今年で創立72周年を迎えた大隅半島唯一の工業高校である。現在、機械科（2学級）・土木科・建築科・電気科・電子科の5学科18学級、総生徒数604人（女子22人）である。

体・徳・知の調和のとれた、心身共に健全な人間形成を目指し、「自律・勤勉・不屈」を教育理念に掲げ、実践力と創造力に富む工業技術者の育成に努めている。本校の特色は、「物づくり」、「資格試験」、「部活動」の三つの柱である。

2 本校における生徒指導

(1) 生徒の実態

- 生徒は、大隅地区全域から入学している。遠方の生徒の為に寮を備えている（現在23名）。
- 各学科とも実習服で熱心に「実習（物づくり）」に取り組み、「資格試験」に向けて朝補習を学級全員で取り組み、放課後は、各々の「部活動（入部率78%）」で心身を鍛える様子が窺え、活気のある毎日を送っている。
- 進路に関しては、100%の内定率を誇る（就職7割・進学3割）。ほとんどの者が県外へ就職していく現状があり、「3年後は即社会」という共通認識の下、進路指導と生徒指導の両輪で生徒の進路実現を支援している。

(2) 生徒指導上の課題

近年、生徒指導上の問題行動数は、減少傾向にあるが、新たな問題行動が生まれてきている現状がある。

- 【課題】
- ・ インターネット上のトラブルに関する問題行動事案
 - ・ 人間関係づくりに関する生徒指導上の問題行動事案

3 調査対象学級の状況とSNS等利用の実態（6月実施）

(1) 概観

- ・ 2年X組は、男子30人、女子5人の計35人。
- ・ 全体的には穏やかな雰囲気であるが、男女は多少遠慮がちな接し方が見られる。

(2) 調査結果

ア 6月実施の「学校楽しいーと」

X学級・本校1学年の平均値は、表1・図1に示す結果であった。

表1 「学校楽しいーと」各観点の平均値比較

観 点	X組	学年
友達との関係	12.2	12.4
教師との関係	10.4	10.6
学習意欲	11.3	11.3
自己肯定感	10.8	10.9
心身の状態	9.5	9.9
学級集団における適応感	11.7	12.4

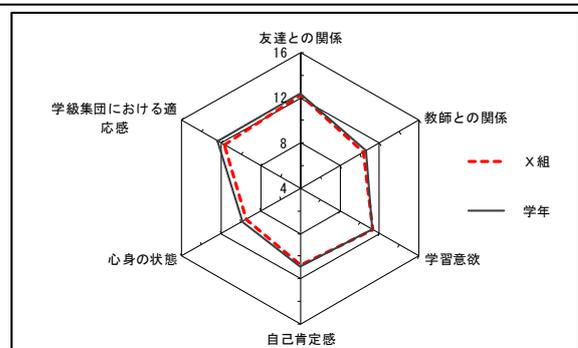


図1 学級平均値レーダーチャート

学年の平均値と比較すると、「心身の状態」と「学級集団における適応感」の平均値が他の観点に比べるとやや低いが、それ以外はさほど差はない結果であった。個別の結果については、特に気になる生徒は見受けられなかった。

イ 「 SNS チェックシート」 の観点別調査結果

○ 週の SNS 利用について				○ 平日の SNS 利用時間について			
ほぼ毎日	週に 3～4	週に 1～2 日	ほとんど利用しない	2 時間以上	1～2 時間未満	30 分～1 時間未満	30 分未満
24 人	6 人	3 人	1 人	6 人	11 人	6 人	11 人
○ SNS を使い始めてからの経験年月について				○ 普段、 SNS をするメンバーについて			
2 年以上	1～2 年	6 か月～1 年	6 か月未満	21 人以上	11～20 人	6～10 人	1～5 人
12 人	17 人	3 人	2 人	8 人	2 人	9 人	15 人
○ 普段、 利用する SNS の学校のメンバーについて							
ほとんど学校内のメンバー	学校内のメンバーが半分より多い	学校内のメンバーが半分より少ない	ほとんどが学校外のメンバー				
4 人	13 人	12 人	5 人				

多くの生徒が高校からスマートフォン等を所持し、そのほとんどが、ほぼ毎日「SNS」を利用している現状がある。利用時間においても、半数の生徒が平日 1～2 時間利用している。SNS のメンバーについては、いくつかのグループに所属し、やり取りをしている。学校以外のメンバーとのやり取りも多く、ネットで広がる交友関係を保護者も気にしている。

表 2 学級の「SNS 観点」の割合

観 点	1 回目
「SNS をめぐるトラブル」への備えの意識	78.9%
「SNS をめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	58.8%
「SNS 利用のやり取り」の親和性	61.0%
「即レス」の悩み・負担感	68.8%
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	75.2%

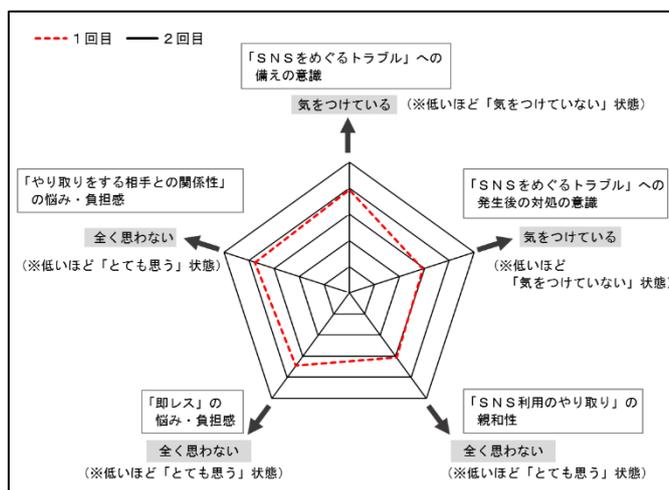


図 2 学級の「SNS 観点」レーダーチャート

『「SNS をめぐるトラブル」への備えの意識』は、非常に高く、毎年行っている外部の関連機関に依頼している「情報モラル」講話の成果であると考えられる。先の SNS 利用状況からも、複数のグループに所属し、複数の相手とのやり取りの中で起こりうる『「即レス」の悩み・負担感』を抱くことがないように、今後、手立てを講じる必要があると考える。

ウ 「豊かな人間関係づくり」の観点別調査結果

表 3 1 回目「学級での友人関係に関する」調査で否定的回答が多かった質問項目

	度数分布 (人)			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気づいている【自己理解】	4	18	8	2
・ 友達の考えや気持ち分かっている【他者理解】	6	18	8	0
・ 友達の立場を考えながら自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えることができる【コミュニケーション行動】	2	25	13	0

表4 「豊かな人間関係づくり」の3視点に関する結果

視 点		1 回目
1	自他の理解	75.9%
2	他者や集団への適応	75.6%
3	他者と交流する実践力	75.3%

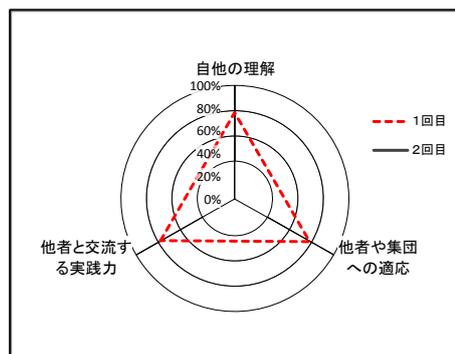


図3 学級の三視点レーダーチャート

友人関係においては、男女の比率から圧倒的に男子が多い学級であり、男女間に遠慮がちな距離感を感じることから、「自己理解」や「他者理解」を深める機会を積極的に設けるようにし、コミュニケーションが図れるように普段の授業においても仕掛けていきたい。

4 対象学級に対する「豊かな人間関係づくり」の指導・支援

(1) 生徒会による「生徒間ルール」、「いじめ撲滅宣言」の実施

年度当初に生徒会が中心となって、各学科のインシャルの頭文字をとって生徒間ルールをつくり、鹿屋工業生としての自覚と誇りを高め、より安心で安全な学校づくりを目指すことを宣言した。各学級に掲示をして「人権意識」を高め、よりよい人間関係づくりの基盤を示した。

(2) LHRにおける取組

【リフレーミング】

1年生の頃に比べれば、各行事を通して生徒間の交流が図られているが、学級替えがないために、交友関係に限られたり、男女間で互いに遠慮し合ったりする関係になりやすいことから、「自分のマイナスな面を友達にリフレーミングしてもらおう活動」を実施し、自己開示・他者理解・自己肯定感を高める機会にした。

【SNS疲れとマナー】

1回目のアンケート調査結果を受けて、「夏休み前、SNSの使い方を見直そう」というテーマで授業を行った。インターネット上でのメッセージによるコミュニケーションでは、相手の状況をよく分からない状態で行ってしまうことから、相手の状況を理解しないまま一方通行のコミュニケーションになる危険性がある。SNSを利用する上で、「既読無視」や「即レス」の問題で心を悩ますことなく、相手の立場を気遣う大切さや自分の受け止め方の問題もあることを認識させる機会にした。

(3) 授業（保健・体育）における取組

【保健】

授業の中で、リフレクションタイム（振り返りの時間）を導入し、ペア学習を進めながら、主体的・対話的な学び（「アクティブ・ラーニング」）を設定した。

【体育】

日常生活や授業の中では、「競い合う」ことが多くなる。そのため、あえて授業の前後の活動は、ペアストレッチなどを導入し、互いに「触れ合う・支え合う」活動を実施した。

(4) 学校行事等の活用

2学期に行われた体育大会や文化祭を通して、学科や学級の所属意識を高める機会とした。体育委員や文化委員などリーダー養成の場や自治活動の機会となるよう支援した。

(5) 1回目の調査後の教育相談の実施

1回目の「学校楽しいと」等の結果を受けて、支援が必要な生徒に対して教育相談を行った。

5 2回目調査結果による実践の検証

(1) 10月実施の調査結果

ア 「学校楽しいと」の観点別調査結果

表5 「学校楽しいと」各観点の平均値比較

観 点	1 回目	2 回目
友達との関係	12.2	12.0
教師との関係	10.4	9.6
学習意欲	11.3	10.6
自己肯定感	10.8	10.7
心身の状態	9.5	9.9
学級集団における適応感	11.7	10.9

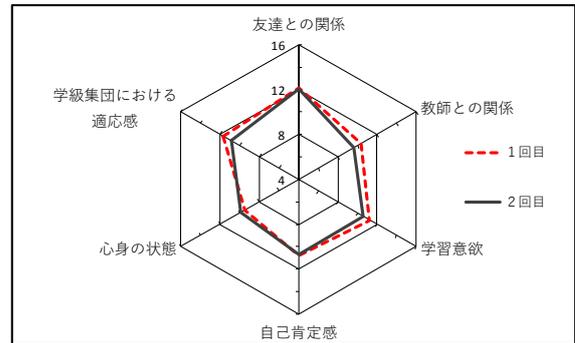


図4 学級平均値レーダーチャート

- ・ 1回目の結果と比較すると、「学級集団における適応感」, 「教師との関係」, 「学習意欲」が下がった結果となった。これは、学級内の人間関係に関するトラブルが発生し、教師が介入したことが影響していると考えられる。
- ・ 個別の結果については、教育相談の材料とした。

イ 「SNS チェックシート」の観点別調査結果

表6 学級の「SNS 観点」の割合

観 点	1 回目	2 回目
「SNSをめぐるトラブル」への備えの意識	78.9%	77.8%
「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処の意識	58.8%	56.8%
「SNS利用のやり取り」の親和性	61.0%	61.8%
「即レス」の悩み・負担感	68.8%	72.1%
「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感	75.2%	74.4%

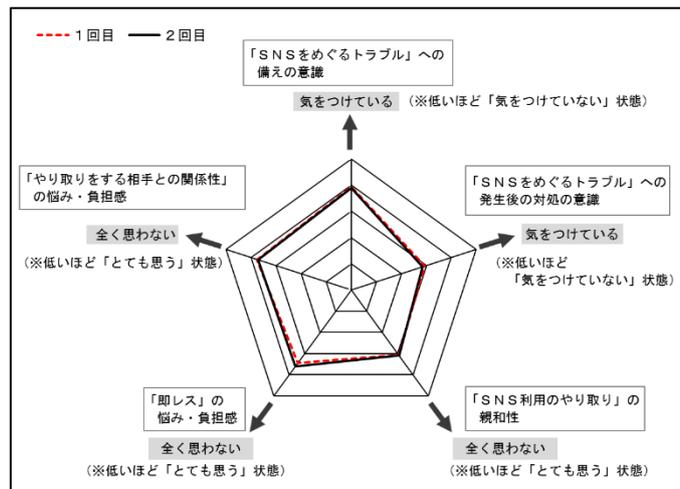


図5 学級の「SNS 観点」レーダーチャート

SNS 観点においては、『即レス』の悩み・負担感が改善した結果であった。このことはLHRでの取組の成果と考える。具体的には、メッセージを送る前に問題がないか確認する割合が増えており、相手を「察する心」が育てば、トラブルも減ると考える。

ウ 「豊かな人間関係づくり」の観点別調査結果

* () は1回目

表7 2回目「学級での友人関係に関する」調査で否定的回答が多かった質問項目

	度数分布 (人)			
	4. よくあてはまる	3. あてはまる	2. あてはまらない	1. 全くあてはまらない
・ 自分のよさに気づいている【自己理解】	2 (4)	23 (18)	8 (8)	1 (2)
・ 友達の考えや気持ちがかかっている【他者理解】	5 (6)	27 (18)	2 (8)	0 (0)
・ 友達の立場を考えながら自分の考えや気持ちを分かりやすく伝えることができる【コミュニケーション行動】	3 (2)	21 (25)	9 (13)	1 (0)

表8 「豊かな人間関係づくり」の3視点

視 点		1回目	2回目
1	自他の理解	75.9%	76.8%
2	他者や集団への適応	75.6%	72.1%
3	他者と交流する実践力	75.3%	72.9%

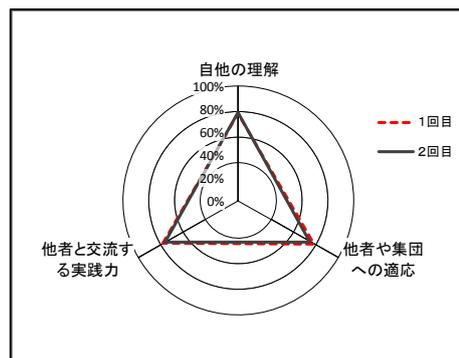


図6 学級の3視点レーダーチャート

授業での取組などにより、「他者理解」の観点が上がった。一方、「他者や集団への適応」と「他者と交流する実践力」の観点下がった状態になっていることが分かった。これから3学期に修学旅行が計画されているため、クラス間の絆を強くなるように取組を検討したい。

6 研究成果と今後の課題

(1) 研究成果

- 「学校楽しいと」等の活用を通して、普段の生徒の見立てを客観的に数値で見立てることができ、2学年の各担任の先生方の生徒理解に繋がった。
- SNS利用が広がる中、生徒自身が「SNS上のコミュニケーションは、対話による会話とは違うコミュニケーションの方法である。」ということを理解することで、事前のトラブル予防につながる心構えをもたせることができた。
- ペア学習を進めたことで触れ合いが深まるようになり、その結果、自己開示・他者理解を促し、コミュニケーション能力や相手を察する気持ちを身に付ける機会となった。

(2) 今後の課題

- 今回の研究結果を踏まえ、「学校楽しいと」等の質問紙による生徒理解を今後継続して活用していく（客観的理解）。
- 自己理解や他者理解の機会を授業やLHRに仕掛けていく（「アクティブ・ラーニング」の必要性）。
- 生徒の情報モラルに対する意識を向上させる為には、今後も日常モラルを高める必要性がある（情報モラル＝日常モラル）。